

岸田劉生晩景

松本清張

新潮社



きしだりゆうせいげんけい
岸田劉生晩景

昭和55年10月15日印刷
昭和55年10月20日発行

著者 松^{まつ}本^{もと}清^{せい}張^{ちよう}

発行者 佐藤 亮一

発行所 新潮社

東京都新宿区矢来町71 〒162

電話業務部(03)266-5111

編集部(03)266-5411

振替東京4-808番

印刷 二光印刷株式会社

製本 神田加藤製本株式会社

© Seicho Matsumoto, 1980, Printed in Japan

定価 980 円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

岸田劉生晩景・目次

骨壺の風景	5
筆写	45
女囚	93
鳥羽僧正	117
北斎	137
岸田劉生晩景	155

装画 正井和行

岸田劉生晚景

骨壺の風景

両親の墓は、東京の多磨墓地にある。祖母の遺骨はその墓の下に入っていない。

両親は東京に移ってきてから死んだが、祖母カネは昭和のはじめに小倉で老衰のため死亡した。大雪の日だった。八十を越していたのは確かだが、何歳だったかさだかでない。私の家には位牌もない。

カネは父峯太郎の貧窮のさいに死んだ。墓はなく、骨壺が近所の寺に一時預けにされ、いまだにそのままになっている。

寺の名は分らないが、家の近くだったから場所はよく憶えている。葬式にきた坊さんが棺桶の前で仏子を振っていたので、禅宗には間違いない。暗い家の中でその仏子の白い毛と、法衣の金襴が部分的に光っていたのを知っている。読経のあと立ち上って棺桶の前に偈を叫んだ坊さんの大きな声が耳に残っている。私が十八、九ぐらいのときであった。

城下町の小倉には禅宗曹洞派の寺が多い。藩公の菩提寺がそうだし、鷗外の小説や日記に出てくる安国寺もまたそうである。もとより祖母の骨壺を預けた禅寺はそんな立派なものではなく、陰気な庵寺であった。賑かな通りから裏に入った場所で、低い門と短い塀とがあった。角地にあったが、その小さな寺の前だけは、じめじめと湿って穢れていた。真向いは酒屋だの荒物屋など

がならんでいた。横通りは烏町といってひっそりと静かな店がならんでいた。

小倉の目抜き通りは昔から魚町で、南北の筋になっている。魚町が南に尽きたところから旦過市場がはじまる。ほとんどが魚屋で喧しい呼び声の気ぜわしい雑踏となっていた。寺のある通りは、魚町と旦過市場とを交差した東横丁で、佗しいもたやばかりの小姓町筋となる。その一つ東側の筋が紺屋町で、西の端は旦過市場のまん中につながる。小倉の町は碁盤の目になっている。その紺屋町一丁目で両親は飲食店を営んでいた。骨壺を預けた寺と通りが一つ違う。

私はよくその寺の前を通っていた。間口の狭い古い門、その上のずれ落ちそうな瓦、よごれた土塀。塀の下は通行人の棄てたものが散らかり、夜は格好の放尿場所になっていて、じくじくと濡れていた。その塀の上からは本堂の四注の屋根がのぞき、門の中からは蘇鉄の青い葉が見えた。私はついそ一度もその門をくぐったことはなく、ああここにばばやんの骨が置いてある、と思つては前を素通りした。

骨壺を寺に一時預けにするのは墓ができるまでの約束だが、金のかかる墓石が父に造れるはずはなく、そのまま預け放しだった。骨壺の寺預けというのは大半が貧乏人のすることである。

祖母カネの骨壺は、私の家にそれを置く仏壇もなく、押入れの隅にかなり長いこと置いてあった。黝い釉のかかった陶器は、蓋の上から一本の針金で十文字に縛っており、針金にはうすらと錆がついていた。木箱にも入れてなく、白い布にかんたんに包んであった。押入れの襖を開けるたびにそれが眼に入った。はじめのうち気になっていたにちがいない父は、馴れるにしたがつてその骨壺がガラクタ道具に見えてきたのであろう。

父は幼いときにカネ夫婦に引取られた貰い子であった。しかし、血がつながってないために父

が祖母の骨壺を粗末にしていたのではなかった。彼は天成の樂天家であつた。どんな苦境でも、くよくよと打ち沈むことはなかった。生涯貧乏に埋れたままだったが、その貧乏からものごとを苦にしない樂天性ができていた。そうして横着者であつた。骨壺の放置もその例だつた。

私がもの心のついたときの父の職業は、人力車挽きであつた。祖母は餅を造つて往還ばたの店さきにならべ、母がそれを手伝つた。それからの父の仕事は空米相場師、債權取立て業、呉服店の下足番、露店商人、路傍の餅売り、飲食店、魚の行商というように變つた。どれ一つとして成功したためしがない。が、父はどのようなときでも明るい顔で人としやべつていた。自分ではひとかどの知識人だと自惚れ、座談の達人だと心得ていた。その知識は丹念に読む新聞からのもので、それには若いとき広島で弁護士を書生をしていたときに得た生かじりの法律知識が下地になつていた。彼は明治十四年の生れで、明治の末から大正、昭和のはじめにかけての政界の話が最も得意だつた。しかしその多くは新聞雜誌で読んだ著名政治家のエピソードだつた。その話題はたしかに人を面白がらせ、感心させる。

けれどもそれは相手に興味の持続があれば長つづきするが、たいていは彼の「政治談義」につき合いかねた。同じくらしいの予備知識がなければ、すぐに飽いてくることだつた。

あんたの話は実がないけんのう、と母は、そんなことをひとりで面白そうにしゃべる父を非難した。じつさい母からすれば、父がだれかれとなくつかまえてはする政治講釈は貧乏暮しにはなんの足しにもならない空疎なものだつた。実益のないそんな話よりも、一文でも借金返しの工面に動いてもらいたいのだ。母からみると、父は働きがなかった。

私の憶えている限りでも借金取りに絶えず責められている父の姿がある。おもに飲食店をして

いる頃だが、仕入れ酒の代金が重なり、家賃が滞っていた。酒屋からは掛売りを断わられて、一升瓶の現金買いになった。そのほうはなんとかやりくりできても、溜めた家賃の催促はきびしかった。どの家に移ってもそれは変りなかった。明日からのことをあれこれと思い悩むのか、冬は火鉢の前に背を屈めてつくねんと考えこんでいた。人がくると饒舌になるだけに、ひとりになって沈黙した姿が哀れに映る。が、灰の中深く突き立てた火箸を固く握ってうつむく父は、いつか灰の上に水のように澄んだ涙汁を長く垂らしているのだった。

どんなときでもものごとを苦にしない父とは違い、母は心配性で、さきざきのことをいつも気に病んだ。母が心から笑った顔を私はあまり見たことがない。父がそんなふうだからしぜんと苦労性になった。母には妹と弟が一人ずついたが、姉さんと話すと愚痴ばかり聞かされると苦逃げていた。それは暗に、甲斐性のない姉のつれ合いへの非難であった。父はよく肥っていて七十キロぐらいはあった。その大きな図体が家の中でごろごろしているの、よけいに横着者に映る。前々から労働ができない人だった。

母タニは働き者で勝ち気だった。広島県豊田郡の百姓の娘で、紡績女工として広島市にいたとき鳥取県日野郡から出てきた父といっしょになったらしい。父峯太郎は、どのような事情からか知らないが、山持ちのかなり裕福な家から米子市に住む松本家へ出された。はじめは里子だったが、実子のない松本夫婦が返さなかったと父の死後に事情を知る鳥取県の人から聞いた。この貰い子を育てたのが松本カネで、私の祖母である。

峯太郎は米子の養家を十七、八くらいのおきにとび出した。若いとき「四十曲り」という伯耆と美作にかかる峠を歩いて越えた話をよくしていた。それは故郷を出たきり生涯帰れなかった郷

愁からだった。子供のころに馴染んだ風景を彼はいつまでもなつかしがっていた。

峯太郎は広島市でタニと夫婦になって何人かの子を生んだが、タニを籍に入れなかった。これも彼のルーズさからか、生涯の妻にする気がなかったのか、よくわからない。タニは眼に一丁字がなかった。おまえは素養がない女だ、と峯太郎はよく言っていたから、いつかは別れるつもりで入籍させなかったのかもしれない。先に生れた子らは早死し、戸籍の上で私は「庶子」になっていた。

峯太郎とタニはよく夫婦喧嘩をした。その傍にはいつも影のようにカネが存在していた。

事情を察するに——私は両親についてそのへんをよく聞いたこともないので——峯太郎夫婦が知り合いを頼って広島から小倉へ移ったあと、カネとその亭主の兼吉（つまり私の祖父）は米子を出て下関の壇ノ浦に住み、そこで餅屋を開いたらしいのである。壇ノ浦といっても旧壇ノ浦といったほうで、源平合戦で知られている御裳川に近い。峯太郎とタニは、小倉からその壇ノ浦の養父母を頼ってきたのだろう。十数年ぶりに峯太郎は女房と子（私）づれで養父母といっしょになつたらしい。

旧壇ノ浦は下関と、小さな城下町だった長府の途中で、三里の往還を歩く人々にはちようどいい憩み場であった。すぐ裏が関門海峡のいちばん狭まった早瀬の瀬戸で、まむかいの門司側和布刈神社との間は渦の巻く海がある。その見晴らしのいいところで、上り框に腰かけて茶をのみ餅を食べる人も少くなかった。

だが、茶店でもないその程度の餅売りでは二夫婦が食べられるはずはなく、峯太郎は同じならびにある人力車の立場で車夫となった。私が六つか七つくらいときだったが、もの心がついて

から私が知るかぎりこれが父の唯一の筋肉労働であった。私は、父が三十五歳のときの子だった。祖父兼吉は早く死んだ。早稲の瀬戸が真下に見える二階で息を引きとったが、三つくらいの私にはそのときの家じゅうの騒ぎにかすかな記憶がある。

カネは息子夫婦が喧嘩しても、積極的には二人の間に入らなかった。峯太郎はタニを殴打し、タニが髪を振り乱して畳の上や土間を転び回っても、仲裁に割って入るようなことはなかった。坐ったまま襷がけで、手でまるめた餡を餅の中に包みこみながら、峯さんもおタニさんも仲よしんさいや、夫婦喧嘩をすると家のうちが繁昌せんけにのう、と顔をそむけて伯耆弁で呟くだけであつた。

そういうふうにかネは、息子にも付かず嫁の味方にもならなかった。貰い子夫婦の世話になつてゐる気持からか、中立を心がけるのが自分の生き道と考えてゐるようだった。朝はいちばんに仏壇の花をとりかえる。そこには、つれ合いの位牌がある。蠟燭に火を灯すのも線香をくゆらせて手を合やすのも、すべて襷がけのままだった。性来働き者だったのはたしかだが、くつろいだところを少しも見せなかったのは嫁への遠慮からだつた。峯太郎とはろくに話をしなかつたし、何か言つても彼に冷笑された。カネの話というのは米子の想い出にまつわるものだが、いくらか誇張もあつたようで、峯太郎はそれを嗤うのだった。

私は、この祖母のカネの口からついぞ父を育てた思い出話を聞いたことがない。また父からも養父母に育てられたときの様子を耳にしたことがない。父の幼時の話といえ、郷里の矢戸の川で魚つりしたことや古い神社で遊んだことなどで、米子の話は一度も出なかつた。矢戸は父方の田中家のある土地で、米子とは十里近く離れてゐる。

このことからすると、峯太郎は松本夫婦に貰われて行ったが、ときどきは矢戸の実家に遊びに戻っていたらしい。しかし、田中家に帰れなかったのは養家夫婦が戻すのに応じなかったからで、峯太郎にとって米子は愉快な土地ではなかった。

カネは額が出て、眼が細く、頬が高く、鼻が肥え、うすい唇が横にひろかった。眉を剃り落していたから、禿げ上った額がいよいよ広くて出張つてみえた。今でもその人相の細部を憶えているのは、暗い部屋の前座に坐つてその死顔を私が色紙にスケッチしたからである。(そんなことをしたのは、その数年前に自殺した芥川龍之介の死顔を小穴隆一がスケッチして、それが雑誌などに載っていたからである。そのころ私は芥川の作品を愛読していたので、そのデスマスクに興味をもっていた。)死顔の色紙はしばらく仏壇に飾つてあったが、いつのまにかなくなつた。色紙の横に、二月何日かの死亡日を入れたはずだが、それが昭和何年で、二月の何日だったかはどうしても思い出せない。とにかく、大雪の降つた日であつた。

祖母が生きているときは、私は祖母にそれほどなついていたとは思わなかったが、死んでしまふと、私がいちばん祖母を愛していたことがわかつた。金のない父は祖母の葬式もろくに出せず、その遺骸を火葬場に運ぶのも、よそから大八車を借りてきて棺桶を乗せ、臨終まで使つた蒲団一枚をかけ、父が自分で抱いて行つた。私はその車のあと押しをした。母の弟が一人つき添つただけで、近所から供に加わる人もなかった。あまりに佻しい葬儀に近所は気の毒がつて遠慮したのかもしれないし、父もそれを断つたのだろう。母は門口に立つていたが、寒そうな顔でいつまでも見送つていた。ばば、やんとも長いつき合いじゃつたのう、と言つているようにみえた。

山の麓にある火葬場までは遠かつた。山道にさしかかると積雪は膝の下まで深く、雪にはまり

こんだ大八車の車輪を動かすのに力をふり絞った。車が揺れるたびに、縄がけの棺桶も動いた。火葬場の隠亡が棺を竈の中に入れ、松葉をまわりに詰めこんだ。その松葉の小枝の一つを私も持たされて投げこんだ。このとき鳴咽がこみ上げて、大声で泣いた。

清さん（私を呼ぶ名）、わしが死んだらもう、おまえをまぶつてやるけんもう、と祖母はいつていた。まぶつてやる、というのは守つてやるという意である。

私は、小さいときから他人のだけれども特別に可愛がられず、応援してくれる人もなかった。冷え冷えとした扱いを受け、見くだす眼の中でこれまで過してきた。その環境は現在でもそれほど変つてないと思つてゐる。が、とくにひどい落伍もしないで過せたのは、祖母がまぶつてくれるようにときどきは考へたりする。

このごろになつて私は、小倉の寺に預け放しになつてゐる祖母の骨壺が気になり出した。妙なことだが、夢を見たせいでもある。

小倉の町の東に足立山あだぎやまという蝙蝠こうもりが翼をひろげたような形の六百メートルくらいの山がある。南側の山裾はへんぴなところで、農家がばらばらとあるだけだった。山裾を回った先は足立山の背後に向うもっと寂しい土地である。私は滅多に行つたことがない。

その道を私は歩いてゐた。山裾を回つて少し行くと山林の間に小屋が五つか六つぼつんぼつんと建つてゐた。小さな木造小屋だが、その一軒の窓から老夫婦が姿を出して私のほうを見てゐた。ほう、死んだばばやんはこんなところに住んでゐるのか、と私は夢の中で思つた。祖母の傍にゐる体格のいい老人は遺された写真で見たとおりの祖父兼吉の顔である。ばばやん、こんなところに居るんかな、と私は声をかける。向うは二人とも黙つてゐる。色彩はなく、梅雨空の下のように

に暗鬱な中だった。死んだ人はこういう場所にかたまつて住んでいるのかと私はまわりを眺めている。ばばやんは窓のふちに手を置き、身を乗り出すようにして私のほうをじっと見つめている。そういう夢だった。

死人の村を夢に見たせいだけではないが、私は祖母の遺骨を小倉から引き取り、両親の墓へいっしょにしてやりたくなつた。祖父の遺骨はどこに埋めてあるのか分らない。たぶん、死んだ壇ノ浦近くの寺だろうが、今となつては手がかりがない。

祖母の骨壺の預け先が何と言う名の寺だったかどうしても思い出せない。寺の外観は、宙でも精密な写生図がすぐにも描けそうなくらい記憶しているのに。

現在の北九州市小倉北区というのがもとの小倉市で、私はその地図を買ってきた。碁盤の目の市街図は変らない。ただそれに幅の広い新しい幹線道路ができて、いたるところを切り割いている。市街のまん中を紫川むらさきがわが南から北へ一本の帯で流れているのだが、それにも後から新しい橋がいくつもできていた。私が居たところは北から常盤橋、勝山橋、陸軍橋、貴船橋の四つだったが、いまはそれが七つにもなっている。その紫川の西側一帯は旧城趾で、もと第十二師団司令部第十四連隊が占めていた。いまは市の公共施設や工場地となっている。四つの橋は旧藩時代、西側の城域と東側の町家ちやうかとを結んでいたのだが（当時は橋の数がもっと少なかったかもしれない）、この町家が明治以後の士族町や寺町や商店の通りとなった。城下（小倉藩小笠原家、十五万石）だけに禪宗の寺が多く、一向宗（真宗）のそれは少かった。

私は地図の上で旦過橋を目標にしてみた。紫川から引いた堀川が東南に町家へ彎入して、

神岳川かんがわといっているが、これは外濠のあとで、且過橋はそれに架った短い橋の一つである。昔は紫川に結ぶ神岳川を利用して小さな舟が入り、川岸の市場へ魚や野菜を揚げていた。その市場が且過という名で、この且過市場をまっすぐに北につながる筋が魚町であった。あの寺は、且過橋を東へ渡って魚町と且過市場の間を過ぎた北の角地にあった。その角というのが南北に走る鳥町と東西に伸びる小姓町筋とが交差した四つ辻で、碁盤の目もこのあたりで終っていた。

そういう見当で地図の且過橋を東へ二つ目の辻のあたりを見てみると、以前の小姓町筋は道路が広くなって小文字通りという新しい名になっていた。図上ではその角に寺の記号も名もなかった。

道路の拡張工事で、あの寺はどこかに移転させられたのかもしれない。その寺に一時預けた祖母の骨壺も当然に寺といっしょに移っているはずだ。

一時預けといっても、すでに数十年が経っていた。一時預けが永久預けになっている。小さな寺だったから、その骨壺が未だにその寺に保存されているかどうかも分らなかった。

地図にはその近くに寺が二つあった。宝典寺と安全寺という。それらの名があの寺と判断することもできなかった。

私は用事で小倉に行く次男にこの寺のことを調べてくるように言いつけた。次男は骨壺の主にとって曾孫である。彼が帰ったの報告では、問い合せてみたが、宝典寺でも安全寺でも僧侶にその心当りが無いということだった。ただ、その近くに東仙寺というのがある。同寺は火事で焼け、いまは八幡の桂昌院というのと合併しているという。旧八幡市は小倉の西隣である。次男の調査はそこまです。話にも聞いたことのない曾祖母に彼はあまり関心がなかった。